

第67回(2023年度) 北海道開発技術研究発表会論文

大雪ダム周辺地域の連携による地域活性化 —大雪ダムのインフラツーリズム活用に向けて—

旭川開発建設部 旭川河川事務所 大雪ダム管理支所

○山本 遙輝

出合 寿勇

伊藤 昌弘

新型コロナウィルスの影響で層雲峡温泉街を含む上川町の観光客数が激減したため、地域では、観光の話題作りとして様々な取り組みを実施している。一方、層雲峡地域は、大雪山国立公園内に位置し、石狩川や大雪ダム等の魅力的な未利用観光資源が多数ある。大雪ダムでは、地域と連携し、ダム見学ツアー、これまでほとんど利用されてこなかったダム湖面の活用、監査廊内での飲食物の貯蔵等を行い、地域活性化に貢献してきた。今後は各施策を発展させることや地域共創チーム等の枠組みを活用して、行政間の連携、地元、事業者との連携を強化してニーズの掘り起こしや新たなコンテンツを企画・検討することが重要と考える。

キーワード：大雪ダム、インフラツーリズム、地域活性化、未利用観光資源

1. はじめに

大雪ダムは、北海道上川郡上川町層雲峡大学平の石狩川本流最上部に位置し、北海道中央部一帯に渡る大雪山国立公園内にある(図-1)。同国立公園は北海道最高峰の旭岳(2,291m)を主峰とする大雪火山群を中心に、「北海道の屋根」といわれる一帯が含まれる。その一帯は、アイヌの人々に「カムイミントラ 神々の遊ぶ庭」と称される程の美しい景観を有する。大雪ダムが含まれる上川町には、石狩川を挟み約24 kmの断崖絶壁が続き、高さ200m程度の柱状節理や様々な滝が間近に見られる層雲峡(写真-1)、黒岳山麓にある道内有数の温泉街である層雲峡温泉があり、大雪山観光の中心地となっている。しかし、現状は登山と温泉がメインとなっており、周辺を含む観光資源の更なる活用が望まれている。

一方、2020年以降の新型コロナウィルスによる緊急事態宣言に伴う外出自粛等の行動制限の影響により、層雲峡温泉街を含む上川町の観光入込客数は、新型コロナウィルス影響前(2019年)の約153.7万人から2021年には約40.6万人と1/4程度になる程に大きな影響を受けた。各種旅行支援事業や地元での様々な取組等も行われているが、2022年の観光入込客数は93.5万人と新型コロナウィルス禍前(2019年)の水準の6割程度となっている(図-2)。

上述のように、大雪ダムを含む層雲峡地域は、魅力的な観光資源も複数あるため、観光業の復活・振興による地域活性化に向けては、大雪ダムを含む未利用観光資源の活用や創出が望まれている。

本報告では、近年、大雪ダムが地元と連携し、これまで活用されてこなかった観光資源を活用した地域活性化について、現状、将来像、今後の課題について報告する。

2. 地域概要

(1) 大雪ダムの諸元

大雪ダムの諸元を表-1に示した。大雪ダムは石狩川上流の約233kmに位置し、流域面積291.6km²、湛水面積2.92km²、総貯水量6,600万m³のロックフィルダムで、昭



図-1 上川町と大雪ダムの位置



写真-1 柱状節理(左)と銀河の滝(右)

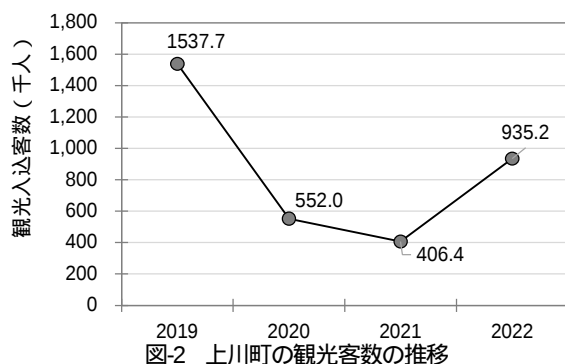


図-2 上川町の観光客数の推移

表-1 大雪ダムの諸元

項目	内容
完成年	昭和50年9月
型式	ロックフィルダム
流域面積	291.6km ²
湛水面積	2.92km ²
総貯水量	6,600万m ³



写真-2 大雪ダム全景

和50年9月に完成した洪水調節、水質保全、かんがい用水、生活用水、発電、親水空間の創出等の役割を持つ多目的ダムである(図-1、表-1、写真-2)。

(2) 上川町の概要

上川町は、北海道のほぼ中央に広がる日本最大の山岳自然公園「大雪山国立公園」の北方部に位置し、面積1,049.47km²、人口約3,153人(2023年11月)の上川郡の町である。主な産業は周辺の豊かな自然環境を活かした酪農、林業に加え、前述のように観光産業が盛んである(図-1)。

3. 取組経緯

新型コロナウイルス禍の影響で上川町の主力産業の1つである層雲峡温泉街を含む上川町の観光客数が激減し

YAMAMOTO Haruki, DEAI Toshio, ITO Masahiro

表-2 大雪ダムの未利用等観光資源

項目	未利用・更に活用可能な観光資源等
自然環境	・大雪ダム湖面(大雪山国立公園にあり、良好な自然環境) ・日本で一番早い紅葉景観
ダム本体	・監査廊での飲食物の貯蔵 ・ダム本体を各種見学会に活用
立地特性	・石狩川流域圏ルート(自転車)の起終点に位置 ・層雲峡温泉街から車で15分圏内に位置

ていることから、上川町、層雲峡観光協会では、観光の話題作りとして様々な取り組みを企画・実施してきた。

一方、国交省の北海道における観光の位置づけは、第9期北海道総合開発計画に関する計画部会報告(2023年9月)において「他で代替できない北海道の価値」として「観光」が目標1の中で明示されている。また、地域と連携して、魅力的な水辺空間の創出、水辺利活用を促進し、北海道らしい地域づくり・観光振興に貢献する「かわたびほっかいどう」が推進されている。更に、

観光庁においてはインパウンドの本格的な回復を図るため、地方公共団体・観光地域づくり法人(DMO)・民間事業者等が実施する、特別な体験コンテンツ・イベント等の創出等を支援する観光再始動事業を実施し、観光産業の振興に努めている。

そこで、大雪ダムでは、層雲峡観光協会等の地元と連携し、ダムを活用した各種施策を実施するに当たり、大雪ダムおよびその周辺環境の未利用あるいは更に活用可能な観光資源や立地特性について整理・検討を行った(表-2)。

その結果、自然環境面では、ダム湖面が良好な自然環境を有しているにも関わらず未利用な点、日本で一番早い紅葉景観という点が挙げられた。ダム本体では、他のダムでも例があるように監査廊で飲食物の貯蔵が可能である点やダム本体を各種見学会に活用する点が考えられた。周辺環境では、ダムが石狩川流域圏ルート(サイクルルート)の起終点に位置する点、層雲峡温泉街から車で15分圏内に位置する点が挙げられ、これらの点を組み合わせ、観光資源として活用することが重要であると考えられた。

4. 地域と協働した取組事例

以下、3で検討・整理した大雪ダムの未利用等観光資源を活用し、地域と協働して観光振興に取り組んだ事例を紹介したい。

(1) 大雪ダム満喫ツアー(ダム本体の活用)

層雲峡温泉事業者と協働し、ダム放水路・監査廊等の施設見学(ダムの役割等の説明を含む)、ダムカードの配布、ダムカレーをセットにした満喫ツアーを企画・運



写真-3 大雪ダム満喫ツアーの実施状況

表-3 大雪ダム満喫ツアーの概要

項目	内容
開催日	2022年7月1日～現在も実施中
実施主体	層雲峡温泉事業者
運営主体	層雲峡温泉事業者
協力	大雪ダム管理支所
活用観光資源	ダム施設（監査廊・放流施設等）

営した。大雪ダムはダム見学・ダムカードの配布までを担当し、温泉事業者はツアーの募集、大雪ダムまでの送迎、ダムカレーの提供等を担当した。同ツアーは2022年7月1日から開始され、現在も実施中である（写真-3および表-3）。

なお、現在はダムカレーの提供は行っていない。

(2) 大雪ダムde紅葉SUP体験ツアー&通訳ガイド育成事業（非結氷期ダム湖面利用）

当事業は、観光庁による「観光再始動事業」として、普段は入れない「国立公園内「大雪ダム湖」」にて新しいアクティビティ観光コンテンツの提供とSUP通訳ガイドの育成を行う事業である。昼間は自然に優しいSUPを活用した「紅葉と大雪湖を楽しめる水上散策ツアー」、夜間は、照明演出を駆使した「ナイトSUPツアーや星空ウォッチング体験」を実施した。これまでほとんど利用されてこなかったダム湖面およびその周辺の大自然（インフラ）を活用し、今しか見れない、ここでしか体験できない価値を提供するツアーの協働を実施した。また、昨今のガイド人材不足が深刻化していることから、インバ



写真-4 大雪ダムde紅葉SUP体験ツアーの実施状況

表-4 大雪ダムde紅葉SUP体験ツアー等の概要

項目	内容
開催日	2023年9月16日～10月15日
実施主体	ジャンボツアーズ北海道会
運営主体	（一社）層雲峡観光協会、K-LABO、（株）infollect base
連携市町村	上川町
協力	大雪ダム管理支所
活用観光資源	ダム湖面

ウンド受入れに際しての通訳ガイドの育成（地域住民及び在日留学生）を行う事により、地域への移住促進や効果的な通訳ガイドツアーや運営を目的に実施した。事業実施主体（ジャンボツアーズ北海道会）、運営主体（層雲峡観光協会等）にダム湖面の利用許可を与える形で2023年9月16日～10月15日まで実施された（写真-4および表-4）。

(3) 大雪ダムdeアイスカラーセル&冬遊び（結氷期ダム湖面利用）

当事業は、観光庁による「地域独自の観光資源を活用

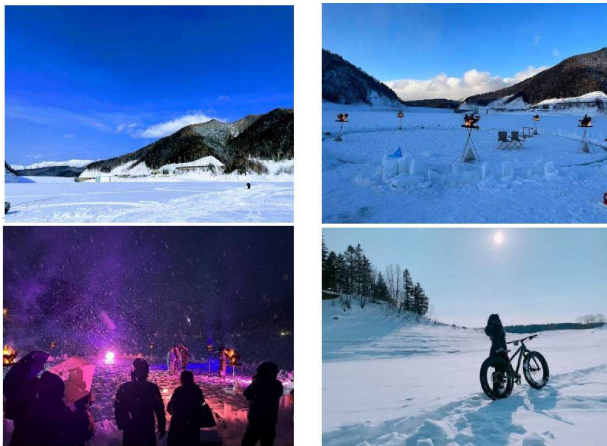


写真-5 大雪ダムdeアイスカレーセル&冬遊びの様子

表-5 大雪ダムdeアイスカレーセル&冬遊びの概要

項目	内容
開催日	2023年1月29日～2月4日
運営主体	ジャンボツアー北海道会
連携団体	一社) 層雲峡観光協会、上川町大雪山DMCツアーズ(株)、十勝バス(株)他
連携市町村	上川町
協力	大雪ダム管理支所
活用観光資源	ダム湖湖面

した地域の稼げる看板商品の創出事業」として、普段は入れないダム湖の中、しかも国立公園内で楽しむことができる、新しい冬期アクティビティ観光コンテンツとして企画された。地域の観光事業者と連携し、ダム湖で楽しめる全く新しいアクティビティコンテンツ「アイスカレーセル(氷のメリーゴーランド、フォトウエディング、アイヌ舞踊披露)、ガイドツアー(冬遊び、星空ウオッチング等)を実施した。事業にあわせて、とかち帯広空港と旭川空港から「十勝川温泉」、「層雲峡温泉」を経由するシャトルバスを実証運行し、期間中開催している冬の祭典「層雲峡氷瀑祭り」、「彩凧華」を楽しむ滞在型の周遊観光コンテンツの醸成を目指した。事業実施主体(ジャンボツアー北海道会)、運営主体(層雲峡観光協会・上川町大雪山DMCツアーズ・十勝バス等)にダム湖面の利用許可を与える形で大雪ダムが協力した。当事業は2023年1月29日～2月4日まで実施され、2024年も同様に実施が計画されている(写真-5および表-5)。

(4) 飲食物の貯蔵実験(ダム監査廊の活用)

先行する他ダムの事例を参考に、2022年から大雪ダム監査廊を活用した飲食物の貯蔵実験を開始した。大雪ダムの監査廊は、ダムに貯水される冷涼な水温によって、外気温に関係なく年間を通して気温9℃程度、湿度70%程度に保たれるCO₂を出さないカーボンニュートラルな

低温貯蔵庫である。募集対象は、地域活性化を目的としていることから、個人ではなく上川町内の事業者または地域振興に取り組む団体とした。

その結果、地元日本酒造会社が選定され、2022年8月から日本酒貯蔵を開始した。なお、地元日本酒造会社は、北海道に戦後初めて設立された酒蔵で2017年5月



写真-6 監査廊内への日本酒の貯蔵(上)、搬入(下左)、搬出(下右)の様子

表-6 飲食物の貯蔵実験の概要

項目	内容
開催年	2022年8月～
運営主体	大雪ダム管理支所
連携市町村	上川町 産業経済課
利用団体	上川大雪酒造
貯蔵物	日本酒
活用観光資源	ダム監査廊

河口から大雪ダムまで石狩川をまるごと楽しむルート！



図-3 石狩川流域圏ルート(サイクルルート)の抜粋



写真-7 石狩川流域圏ルート（サイクルルート）を楽しむ様子

に誕生した。2023年7月に貯蔵した一部の日本酒を搬出し、上川町内、酒造会社HPで限定販売し、好評の内に売り切れた。日本酒搬入・搬出にはボランティアを募集し、人力で行い、カーボンニュートラルをアピールした（写真-6および表-6）。

(5) 石狩川流域圏ルート（サイクルツーリズム）

大雪ダムは、石狩川河口から延長約333kmのサイクリングルートの起終点にあたり、全道9つのサイクルルートの1つである（オホーツクサイクリングルート、トカプチ400の中継点に位置）。大雪ダムでは、かわたびほっかいどうと連携し、パンフレットの発行（サイクルマップ、見どころガイド）、HPでのルート周知、走行環境の整備を行い、サイクルツーリズムを支援している（図-3および写真-7）。

5. 各取組の成果と今後に向けて

(1) ダム本体の活用（満喫ツアー）

層雲峡温泉街への宿泊と大雪ダム見学をセットしたプランとして展開したが、対象は限定的であり、更なる活用が求められる。

今後は、インバウンド向け、修学旅行、宿泊研修などの教育旅行等、ターゲットを幅広くすると共に、ダム見学による防災教育や防災意識向上も視野にダム本体を観光資源として活用を行い、地域と連携し、観光振興に取り組むことが重要と考える。

(2) ダム湖面利用（SUP・アイスカラーセル等）

ダム湖面を利用した取組では、ハワイからの1団体、沖縄からの3団体を含む計348名の利用があった。今回のダム湖面の利用期間は、非結氷期が9月中旬～10月中旬、結氷期が1月末～2月初旬と期間としては短いものであった。今後は通年のコンテンツ開発が望まれる。近年の修学旅行、教育旅行には、アクティビティが含まれる傾向があり、道内でもニセコや空知川でのラフティング体験やカヌー体験を行う小学校・中学校が少なくない。今回は大雪ダムの湖面利用のみのアクティビティであったが、より広域的視点でダム下流の石狩川を活用したコンテンツ開発の検討も必要と考えられる。

地域共創チーム（仮称の取組“イメージ”）

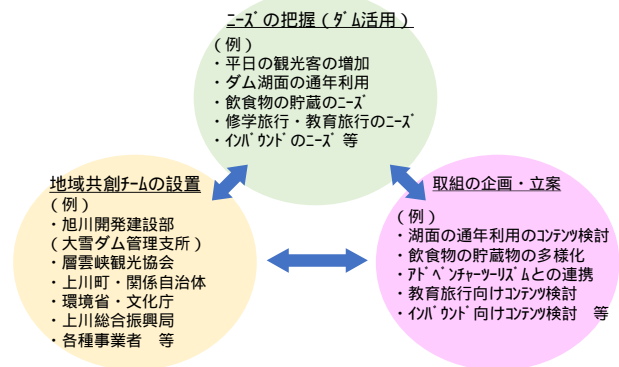


図-4 大雪ダムで想定される地域共創イメージ

(3) 飲食物の貯蔵実験

地元上川町の酒蔵の日本酒をダム監査廊に貯蔵したこの取り組みは、新聞各社やNHK等のTVニュースにも取り上げられ、大きな反響を呼んだ。

今後は、監査廊内の貯蔵に適した地元特産物の更なる発掘を行い、日本酒以外にも地域振興の可能性を秘めた特産物を観光振興や地域活性化につなげる必要があると考える。また、大雪ダムで貯蔵された「日本酒」は、そのまま販売するだけでなく、さらに付加価値をつけた観光資源として活用するために、先に述べた「ダム見学」とセットして展開する等の発展も考えられる。

(4) サイクルツーリズムの推進

現状では、ルートマップ発行、HPでのルート周知、走行環境の整備に止まっているが、サイクリングモニュメントの整備や記念撮影場所の整備（大雪ダム天端右岸アナウンス広場等を想定）等により、より利用者を多くするための取組が必要と考える。

6. まとめ

本報告では、大雪ダム管理支所におけるダムおよびその周辺のインフラストックを活用した5つの取組を紹介した。いずれの取組についても、まだ、取組の初期段階であるが、ダム活用を中心として地元自治体、地元観光協会、観光事業者、交通事業者、地元を含む各事業者、教育関係者と様々のつながりを創出、あるいは今後創出できる可能性が示唆され、いずれも観光振興を主軸にした地域活性化に寄与できるものと考えられる。今後も新たな未利用観光資源を協働して発掘、創出していくと共に地元自治体や各事業者と検討を行い、取組を推進していくことが重要である。環境省では「国立公園満喫プロジェクト」が推進されており、8つの国立公園をモデルに自然を満喫できる上質なツーリズムの実現とブランド化を図っており、その中には、本取り組みのSUP、アイ

スカルーセル等にも関係の深いアドベンチャーツーリズムが推進されている。大雪山国立公園は8つのモデル国立公園には含まれていないが、モデル国立公園からの水平・垂直展開も方針として示されている。また、文化庁では日本遺産地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを日本遺産：Japan Heritageとして認定しており、上川町を含む関連自治体は「カムイと共に生きる上川アイヌ～大雪山のふところに伝承される神々の世界～」として認定され、国内外に戦略的に発信する取組が行われている。今後は、これらの省庁間とも連携した取組もますます重要になると考えられる。

旭川開発建設部・旭川河川事務所・大雪ダム管理支所では、各関係機関との良好な関係を維持、更に発展させ、北海道らしい地域づくり・観光振興に貢献する「かわたびほっかいどう」の取組の推進や第9期北海道総合開発計画に示される計画の実効性を高めるための方策として、地域共創チームの取組を意識し（図4）、各関係団体と

の同チームの設置、地域のニーズの把握、取組の企画・立案を行い、「我が国の豊かな暮らしを支える北海道」という目標達成のための、食糧安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道に資する各種取組を継続することが重要と考える。

参考文献

- 1) 上川総合振興局：令和元年度（2019 年度）～令和 4 年度（2022 年度）上川管内観光入込客数調査報告書。
- 2) 中村一貴・黛 和希・三上裕史：帯広河川事務所における「かわたびほっかいどう」の推進について—札内川ダムを活用した飲食物の貯蔵実験等による地域活性化の取組—，第 66 回(2022 年度) 北海道開発技術研究発表会論文。
- 3) 安井明子・越智啓介・伊藤昌弘：J R 旭川駅周辺を拠点とした地域連携による魅力的なかわづくりについて—観光・アクティビティ・教育が融合した水辺利用の推進—，第 66 回(2022 年度) 北海道開発技術研究発表会論文。